

砺波カイニヨ倶楽部会報

第十一号

平成十一年九月発行 発行者 砺波カイニヨ倶楽部 代表幹事 柏樹直樹
事務局 富山県砺波市表町七二十五 TEL 0763/33/6588
天野一男建築工房内

◇囲炉裏を囲んでお話を聞く会

平成十一年七月四日(日)午後 砺波市チューリップ公園内 旧中嶋家にて「外から見た散居村の屋敷林」と題して、國重正昭(四季彩館名誉館長)さんの話を聞いた。三十二名が参加し耳をかたむけた。

カイニヨは洋風の外から眺める庭、もつと「色気」をとりいれたら...

富山のことは、知り合いのNHKの職員からも、富山に赴任した時のことを良く聞かされる。米や魚や酒のおいしさと、人情のよさ、こまやかさがほどよくミックスされている土地だと。

砺波のカイニヨは日本一きれいだ。チューリップ四季彩館も、カイニヨと散居村をイメージして造られている。入り口の丸柱は、スギの木を、まわりの水面は五月の水田をイメージしてある。

このカイニヨの風景を後世に残すために、都市開発の関係において少し行政指導があっても良いのではないだろうか。それと、カイニヨに住む人の意識も変えることが必要だ。今のカイニヨは、従来の役割とちがってきている。

カイニヨに色気を取り入れてみてはどうか。色からたちのぼる気配や雰囲気



國重正昭さん (四季彩館名誉館長)

伝わる花木が加わると、もつと目で楽しめるものになるのではないか。

今日、「ガーデンング」が日本に定着しつつあるが、散居のカイニヨもある意味で洋風の庭である。

和風と洋風の庭の違いは、

一、和風の庭は、座敷から眺めるが、洋風の庭は、家の外から眺める。その点でカイニヨはまわりじゅうから見ることで、表裏なしにすることが求められる。

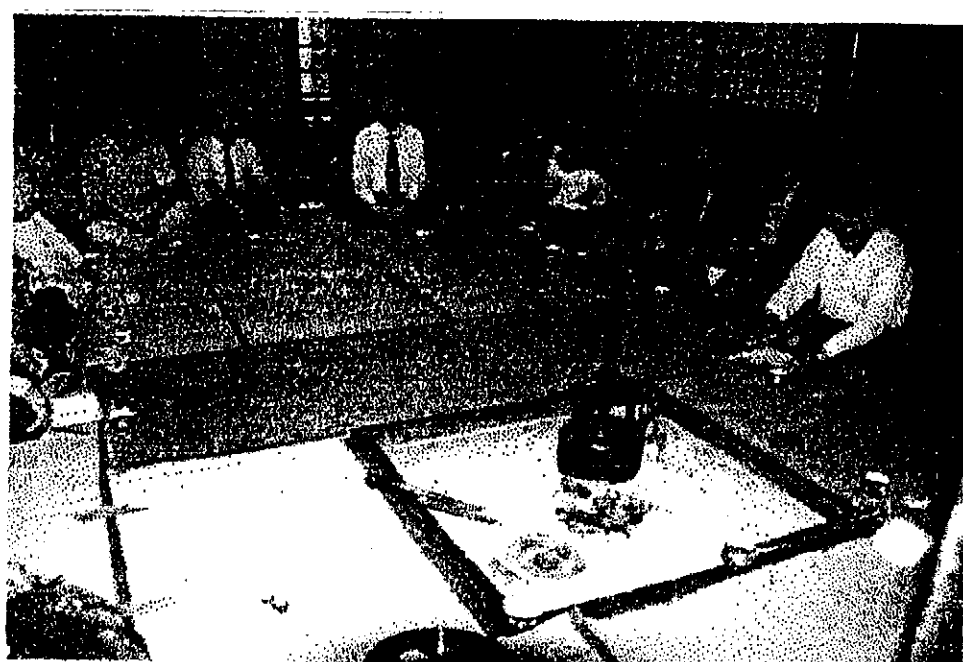
二、和風の庭は、「アウトサイドイン」。部屋の外での生活を中につくる。生け花・盆栽として床の間や玄関を飾る。洋



風の庭は、「インサイドアウト」。部屋の中での生活を外につくる。食事を外に出してシェードトリー(木かげ)での生活空間をつくる。

三、和風の庭は、非自然的で人手をかけて造るためストレスを感じることもある。洋風の庭は、自然的(ナチュラル)で剪定などしないでぼうぼうのままにしている。

カイニヨは外から眺められる洋風の庭で、自然風であるべき。それには、雑木を取り入れ、花木をいれ、下に草花(宿根草がよい)を植える。昔は防風林として使うのが目的であったため自然風だった。現在は、美観にこだわり過ぎている。将来の方向としては、自然な庭になるようシ



フトを変えていくことが必要だ。砺波地方は、気候的に恵まれていて、花が良くできる条件がある。

一、夏涼しく湿度も良い
二、五、六月の天気が良い
三、秋の冷え込みが良い
適した花は、ペチュニア、プリムラ、オダマキ、ギンパイソウなど。

砺波のチューリップ、小矢部のバラづくりにように、農作物(特に根が商品になるもの)によい土地でもある。大根や里芋にもたいへん適している。りんごも適地である。

七月十日(土)太田地区で「市長と語る会」が開かれました。その話し合いから

Q、現在田園空間博物館構想など散居村の保存についての市の考え方は?

- A、カイニヨの管理が面倒であるという考えもあるでしょうが、歴史的・文化的な遺産を保存する大切さを理解してほしいと思っています。屋敷林・散居村の持つ価値には、
 - ①平野の緑環境としての価値
 - ②祖先が作ってきたという歴史的文化的遺産としての価値
 - ③野生生物の生息空間としての価値
 - ④CO2の吸収など大気浄化機能としての価値
 - ⑤身近な自然教育の場としての価値
 があります。これらを考え、田園空間を博物館にしよう、大事な郷土を残していこう、そんな気持ちで対応してほしいと思っていますので、ご理解願いたいと思います。

◇屋敷林の真髓に近づく

親子で木と一緒に実践にふれる

平成十一年八月七日(土)午前 砺波市苗加 高田隼水さん宅と万福寺を見学した。真夏日が続く炎天下の中で、十九名が参加者した。カイニヨの中は、心地よい風がふき、森林浴のひとつときともなった。

高田隼水さん宅では、屋敷林内にゴザを敷いてもらい、屋敷林の説明を受けたあと、柏樹代表幹事が屋敷林の特徴を説明し、全体を見学した。

高田さんの説明では、戦前三十センチメートル以上の高木約百五十本を供木した際に、その木材を出すため、門の根太(ねだ)を切り取られた。現存する二十本程の木は当時三十センチメートル以下のもので樹齢は約百年ほどになる。



高田隼水さん宅での見学

その時に残った木が、大きくなると台風で倒れ家屋に被害を与えたこともあり、屋敷林の根をpushさえるためいろいろな木をたくさん植えた。昔は年に一回枝打ちもやったが、今は自然のままにしている。説明の後、高田さんやおばあちゃんの案内で屋敷林を散策した。

昔の水路跡や現存する表から裏方にかけての水路に参加者の注目と関心が寄せられた。高木と中低木の組み合わせや果樹の多いことにも話が集中した。

何よりも、林内は炎天下にもかかわらず、涼風が体を感じられ、真夏の快適感を体験した。「ここでゆっくり昼ねしとったいなー。」との声も聞かれた。

次ぎに、万福寺の「チャンチン」と前庭の「アカマツ」や中庭を見学した。チャンチンは、古くに中国から渡来した木で、樹幹内部は、蛇の舌のように紅くタテにさげやすい特徴がある。

かつては屋敷や田の境界にあつたが、今では珍木として残っている程度。この境内のものは古く大きい。非常に弱っている下に萌芽枝がみられ、それを次代のものに育てるとよい。

境内のアカマツは樹冠も見事で砺波市

内では屈指のマツ樹叢をつくる。大きい御堂で、会員の尾田武雄さんからお寺の歴史や仏壇の配置の話聞いた。正午で見学会を終え解散した。

高田隼水さん宅屋敷林メモ

柏樹代表幹事の説明より

● たくさん樹種と高木から低木まで、本数が多く入っている。自然のまま屋敷林が造られている。今後も注目したい。

● 林内に高低差があり水路も残っていること。裏方の水路は過去のものを生かしてある。

● ほとんどの木は戦後植えられたもの、家族を上げて木との共生の意識が強いこと、その証明として今の屋敷林を造っている。

● 高木：スギ・サワラ・ケヤキ・エドヒガンザクラ・エンジュ・クリ・アキニレ・イイギリ・ウラジロガシ・タイサンボク

● 中低木：ヒサカキ・ヤブコウジ・ウメモドキ・シロダモ・クワ

● 竹：ハチク

● 果樹：たくさんある。カキ・クルミ・ナシ・ナツメ・アンズ等

● 炎天下でも屋敷林内は涼しく、自然の風が感じられる

お知らせ

● 七月四日に講演していただいた國重正昭さん(四季彩館名誉館長)から、「中嶋家に植えたかどうかと花の咲く樹をカイニヨ倶楽部に寄贈したい」とお手紙をいただきました。時期をみて会での植樹を考えています。

表面タイトル部分



みごとな万福寺の松林